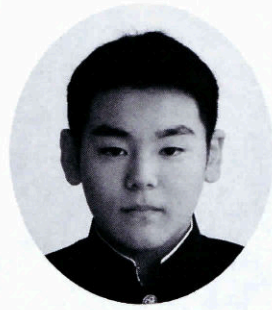


# 言葉の魅力

向津具中学校三年 廣田 祐一



僕たちは五月七、八、九日に修学旅行で、奈良・京都・大阪を旅した。

行く前から一番楽しみにしていたのは、二日目の京都での班別自由行動であった。旅行に出る前から僕たちは、それぞれテーマを決め、そのテーマにそったルートを資料で調べあげていた。

僕たちのグループのテーマは「京都の食文化」と言葉を知ろう」ということに決定していた。食いしん坊で将来料理人になりたいという夢をもっている僕は「言葉」よりも、「食べ物」の方にひきつけられていた。京都にはおいしくて名高い食べ物がたくさんある。その一つ一つをさがして、自分の舌で味わってやろうとはりきっていた。

八つ橋、そばを食べ、たくさん漬け物を試し、五色まめも腹いっぱい味わった。もう十分「京の味」を味わい、雨が降る中を走りまわったので疲れも出ていたのだが、友達が「ここはみたらし団子の元祖であるから行こうや。」

と言ったのでまた、僕たちは雨の中をみたらし団子の元祖をもとめて出かけたのである。

「加茂みたらし団子茶屋」と書いたのれんをくぐってふと顔をあげると、そこにはまるで天使のような微笑みを浮かべた超美人のお姉さん。そして、僕の耳に入ってきたのは、

「おいでやす。」

その一言に僕はしびれた。ぼう然と立ちつくしているその僕にまた

「何にしはりますの?」

お姉さんの一言一言、その響きに僕はもう溶けそうになっていた。僕は好きではないみたらし団子を、ついつい買ってしまった。あの天使のような微笑みを思い出す度に心がポーンとなり他のことなど考えていられないくらいだ。この店に入らなかつたら、僕は京都弁のすばらしさを知ることではできなかつただろう。これほどまでに京都弁が心をとりこにするとは思ってもみなかった。あのお姉さんのことは一生忘れはしないだろう。

「言葉」というものは「食べ物」以上に心をときめかし安らかにしてくれるものだとしみじみ思った。

方言は、その土地の自然や人々によってつくりあげられたものである。京都という町で聞いたあの京都弁だから僕の心をとらえたのである。

「ぢぢえつかつたやろ。今日は、はやす寝のよ。」

「うん。わかった。」

この方言丸出しの会話。僕が修学旅行から帰ってくるなり母が言った言葉だ。この方言丸出しの言葉を聞いて僕の旅のつかれは吹きとんだ。自分の巣に帰ってきたような安らかさが僕を包む。今まで僕の頭の中は、あの団子屋の姉さんの京都弁のことではいっばいだったけど、この時だけはふと忘れていた。今までなにげなく使っ

ていた僕たちの町の言葉がこれほどまでに、人をおちつかせるものだろうかと思つた。

毎日毎日同じ言葉を使って何も思わず生活してきた。方言というものは不思議で、その地域の人にしか分らない微妙な雰囲気をもっている。これは他の地域の人にはまったくわからないことが多い。

僕は今、油谷町の方言の中にどっぷりつかっている。

「ついこの間、わしゃかいちゅう落としたほつちや。」

「おまあ、いやでえ。」

「おどれ!こつぱにするぞ!」

「わいら。しろいど。」

これらの方言からは、荒々しさが感じられる。時には恥ずかしいなと思つこともあるけど、僕のすんでいるこの町は漁業が盛んで、漁師が荒波にもまれながらも魚をとっていることからこのような、荒々しい方言がうまれてきたのだろう。そして、こういう荒々しい言葉を発するこの地方の人々は言葉と同じように荒々しい労働にたえて生きてきたのだろうと思つた。

僕の将来の夢は、この油谷町の特産品を使った料理をつくることだ。油谷湾でとれた新鮮な魚、向津具でとれた米、この油谷町の大地で芽を出してとれた瑞々しい野菜などを使って、どんな人でも食べられて、みんなが心からおいしいといってくれるような料理をつくりたい。

僕の故郷であるこの油谷町の海や、山や、風や、波や、大地や、人々がつくりあげたのが油谷の方言だということを心にきざんでいき、将来ここから出ていくことがあっても、僕はこの油谷町のことをぜったいに忘れず、いつまでも方言のよさを大切にしていきたい。